第1章 学問的ヒットを打つために

1.「学問的ヒット」と「学問的空振り」

本書の中心主題は「社会学をいかに学ぶか」である。だが、この主題に入る前に、「大学でいかに学ぶか」ということについて、一つの基本的論点を確認しておきたい。それは、「大学で学問的空振りに陥らずに、学問的ヒットを打つための鍵は何か」という問題である。ここで、「学問的ヒット」とは、学問に取り組むことによって充実感が感じられること、学問のおもしろさや手応えを感じられることである。学問は一つの文化的活動であるから、音楽や絵画と同じように、的確に取り組むことができるならば、最高の充実感を与えてくれるし、生き甲斐になりうるものである。事実、そのような学問的充実感を感じている人は、理系、文系を問わず、広範な学問分野に見いだすことができる。しかし、現代日本の大学生を見渡したとき、そのような「学問的ヒット」を打つというよりも、「学問的空振り」感にとらわれている人も少なくないように思われる。

ここで、「学問的空振り」とは、学問的充実感を感じることができないこと、「大学生活に期待を持って入学してきたのに、何かむなしい」「いくら出席して講義を聴いていても面白くない」「大学って、こんなものだったのかな」というような状況のことである。ここで取り上げたいのは、大学に進学にするにあたって、はじめから学問には重きを置かず、レジャーランドを期待している人々の体験ではない。そうではなくて、大学生活における学問に期待し、学問

を通して自分を成長させたいと願い、そのための努力も惜しまないという姿勢を、少なくとも入学当初は持っていた者が、にもかかわらず、大学入学後におちいる空しさの感覚や、自分の力が発揮できていないという空振りの感覚である。

そのような人々は、入学試験のための受験勉強に従事している期間、例えば、次のような思いを抱いていたかもしれない。受験勉強は好きになれないし、やりたくない。けれども、あこがれの大学に入ることができれば、自分の好きな学問に打ち込んで、何かすばらしい体験ができるのではないか。

けれども、そのような期待感を抱いていたのに、肝心の大学では空振り感にとらわれる人が後を絶たない。学生たちは、いろいろな困難を克服してようやく大学に入ることができた。中には親の反対を押し切って、非常な熱意をもって、経済的困難や入試の困難を乗り越えて、ようやく入学してきた者もいる。それだけに、1 年次、当初の意気込みは相当のものであったのだ。しかし、1 年次を終えた時点で、空虚感、空振り感にとらわれてしまう。

その原因を、周囲の人々のやる気のなさ、私語のやまない大教室、面白みが感じられない講義、第 1 志望ではなかった不本意さといった外的要因に求めることもできよう。だが、それらの外的要因には還元できないような一人ひとりのあり方が、より大切であると思われる。ここで考えるべきは、学問の方法についての内的要因である。「学問的ヒットが打てる」人と、「空振り感にとらわれる」人の差異は、外的環境の良し悪しによって作り出されるのではなく、学問的充実感を手にする方法を知っていて、それを実行しているかどうかという主体的要因の差異に起因すると私は考えている。その主体的要因は、まず「勉強」と「研究」の違いを知っているかどうかという点にかかわっている。

2．勉強と研究とはどのように異なるのか

学問的空振りを回避し、学問的ヒットを打つための第一歩は、「勉強」と「研究」の区別を知ることである。ここで「勉強」とは、知識を習得し記憶することである。外国語であれ、自然科学であれ、社会科学であれ、あらゆる分野の学問において、知識を習得しそれを記憶するという意味での「勉強」は不可欠である。あらゆる教育組織において、小学校から大学にいたるまで、このような意味での勉強に生徒や学生は従事している。

他方、「研究」とは、問題を設定してそれを解明し、解答を与えることである。その意味での研究は、別に大学でのみなされるわけではなく、初等教育や中等教育でも広範になされている。例えば、小・中学生でも、夏休みには「自由研究」に取り組むということは、よくあることである。それが、単なる知識の習得ではなく、まだ答えのわかっていない問題に対して、解答を与えようとする試みである場合、まさしく、それは「研究」と言える。

ここで注目するべきは、良い研究のためには、勉強による知識の蓄積が必要であるが、勉強の延長上に自然に研究ができるようになるわけではないということである。すなわち、勉強の境地にとどまらずに、研究という独自の活動に進むためには、主体的態度の転換、すなわち、自分が問題を設定することが必要となる。

大切なことは、大学において「勉強」の地平にとどまっているだけであると、学問的空振りが生ずるということである。そのことは、どんなに努力していても、またどんなに良い成績をとっていたとしても、起こってくる。成績が悪いから空振りを感ずるというわけではない。成績が良くても「勉強」だけでは、空振り感が生じてくるのである。これに対して、学問的ヒットを打つためには、「研究」の地平に進むことが不可欠である。研究をしてこそ、学問的充実感

を獲得できるであろう。

研究をするということは、一つの創造的な活動である。わからない問い、あるいは謎がある。研究とは、それを自分のあらゆる能力を動員して解明し解答を与えることであり、絶え間なく自分の頭で考えることを意味する。解答の発見とは、認識の深化であるとともに、考えることによって新しいものを生み出すことである。その意味で、研究は一つの創造である。それゆえ研究は、単なる勉強によっては決して得られない充実感を与えてくれる。

「受験勉強」とはよく言ったもので、その主要な部分は、まさに知識を覚えるという意味での「勉強」である。これに対して、大学では、未知の問題を解明し解答を探すという意味での「研究」に軸足を移すべきである。この軸足の移行ができるかできないかで、大学生活の色調はまったく異なってくる。

残念ながら、このような意味での「勉強」と「研究」の区別がわかっておらず、したがって軸足の移行ができず、主観的には学問を通しての自分の向上をめざして努力しながらも空回りし、なかなか、学問的充実感を味わえない人も、かなり多いのではないかと思われる。だが、学問を通して自分を向上させようという志を持っているのであれば、誰でもちょっとした自覚と方法の獲得によって、学問的に充実した生活を送る道を見いだすことができる。すなわち、勉強ではなく研究が大切であることを自覚し、研究に自分の関心と努力を傾注すればよい。

3．研究と論文とはどう関係するか

では、どのようにしたら研究に取り組むことができるのであろうか。研究をとおして学問的充実感を経験できるためには、具体的に何が必要なのだろうか。そこで、次に理解するべきは、研究と論文

執筆が表裏一体の関係にあることである。研究の成果は論文という形でまとめられなければならない。また、論文を執筆することによって、研究ははじめて完成する。「自分は論文を執筆していないが、立派な研究をした」という主張は成り立たない。

では、論文とは何なのだろうか。論文とはどういう種類の文章なのだろうか。この点についてもしばしば誤解がある。「専門用語を使用した学術的な文章が論文である」というように考えている人がいるかもしれないが、それは誤解である。論文とは「問いの設定」「問いの解明」「答えの提出」という論理的構造を備えた文章のことである（澤田 1977）。このような構造を備えた文章は、すべて論文と言える。例えば、何らかの試験において 1 時間以内に書かなければならない小論文も、1 年間かけて執筆する卒業論文も、10 年かけて完成させた博士論文も、それぞれが「問いの設定」「問いの解明」「答えの提出」という三つの要素を備えているのであれば、長短にかかわらず、論文と言える。

このような意味での論文は、誰でも執筆しうるのであって、研究者でなくても、大学生は言うに及ばず、高校生でも執筆しうるものなのである。

このような意味で論文を定義するならば、日常用語で書かれた論文もあるし、専門用語を使用して書かれた論文もあることになる。学術論文とは、専門用語あるいは専門に立脚した理論を駆使して、作成される論文である。大学で推奨されるのは、学術論文である。そして、いかにしてより優れた研究を行い、それを基盤に、いかにしてより良い学術論文を書くことができるのかが、大学においては絶えず問われる。そのような研究ができるのであれば、かならずや学問的充実感を感得することができるであろう。

4．良い論文を書くための基礎

それでは、良い論文を書くためには、どのような方法が大切であろうか。

第 1 に、「問題の場」と「問題そのもの」とを区別し、疑問文の形で問題を設定することが大切である（澤田 1977）。問題とは問題の場から、いわば切り出されるものである。例えば、「高齢化社会」「公害」「エネルギー政策」というような言葉は、「問題の場」を示してはいるが、「問題そのもの」ではない。これに対し、「高齢化社会の中でいかにして年金の財源を確保するか」「福島原発震災はなぜ防げなかったのか」というような問いは「問題そのもの」を意味しており、その問題を解明しようとすることによって、研究が開始されうるのである。

第 2 に、研究においては、問題をどのように設定するのかが、非常に大切である。実際、問題の発見は答えの発見以上に難しいという指摘もある。問題が正しく設定されれば、答えは半分は見つかったようなものだ、という意見もある。良い研究をするためには、良い問題設定が必要である。それを可能にする一つの重要な条件は視野の広さである。さらに、社会学の場合、問題設定を支える問題意識の質が大切になる。問題意識の質や深さをめぐっては、さまざまな議論がある。それは、科学と価値が交錯する一つの焦点である。この点については、第 8 章で、マックス・ヴェーバーの方法論を検討する際、より掘り下げて検討したい。

第 3 に、「問題設定」を前提にした上で、「問題の分節化」と「分節された問題の体系化」が必要である。問題の分節化とは、設定された最初の問題をより細かな問題群に分けていくことである。例えば、最初の問題として「福島原発震災はなぜ防げなかったのか」という問いを設定したとしよう。この問題に答えていくために、この

問いを次のようなより細かな問題に分けていくことができる。「福島原発の事故は、技術的に見るとどのような経過をたどったのか」「事故の進展の中で、さまざまな技術的安全対策は、なぜうまく作動しなかったのか」「地震と津波の発生後の緊急対処は適切であったのか」「地震や津波に対する事前の安全対策は、なぜ不十分であったのか」「震災発生以前の段階で、原発の安全対策に関してどのような制度的、政策的な取り組みがなされていたのか」「その際、制度的、政策的には、なんらかの欠陥が存在していたのか」等々。

そして、さらに、分節された個々の細かい問いをとりあげ、第二次的な分節をしていくことができる。例えば、「制度的、政策的には、なんらかの欠陥が存在していたのか」という問いは、「行政組織の安全審査にどのような欠陥があったのか」「原子力安全委員会は適切に役割を果たしていたのか」「国会では原子炉の安全性についてどういう議論がされていたのか」「各地の原発建設差し止め訴訟で裁判所はどういう判断をしたのか」などの問いを設定するかたちで、第二次的な分節をすることができる。そして引き続き、第三次的、第四次的……というように分節化を繰り返すことができる。

そのようにして得られた細かな問いの総体について答えていくことによって、最初の問いの解明も可能になる。

次に、「分節化された問題群の体系化」とは、これらの問題群を論理的なつながりが見えやすいように配列しなおすことである。うまく「問題群の体系化」がなされれば、それはそのまま、論文の目次に移行する。

この「問題の分節化」と「問題群の体系化」が大切な理由は、この二つができれば、どんな長い論文も執筆できるようになるからである。例えば、400 字の原稿用紙で 5 枚程度の小論文であれば、多くの人が、特別の準備なしに書くことができるかもしれない。し

かし、400 字で 100 枚ほどの長い論文の執筆は非常に困難に見えるものである。この長さの論文の執筆は社会学の分野では、卒業論文の執筆というような形で、しばしば求められるものであるが、どのようにして執筆可能となるのだろうか。ここで大切なのは、100 枚の長い論文を、5 枚の長さの小論文が 20 編つなぎあわされたものとして、見ることである。最初の問題を 20 の小さな問題群に分節し、それを論理的につながるように配列して体系化し、それぞれの小さな問題を 5 枚ずつの長さで論じていけば、100 枚の長大な論文も執筆可能である。

事実、私のゼミでは、4 万字以上の卒業論文の執筆を課しているが、ほとんどすべての学生がこの目標を達成してきた。中には、400 字で 300 枚の卒論を執筆した者もいる。それが可能であったのは、その人に特別の才能があったからではなく、問題の分節化と体系化という方法を理解していたからであり、その方法を駆使して長大な論文を書こうという意欲をもっていたからである。

5．良い論文を書くための情報蓄積――三系列のノート

良い論文を書くための第 4 の条件として、「三系列のノート」による情報蓄積をあげておきたい。内容の充実した論文を執筆するためには、すなわち、充実した研究をするためには、講義ノート、読書ノート、発見・発想ノートという三系列のノートを蓄積しておくことが必要である。

講義ノートとは、大学における講義とか、さまざまな講演とかの内容を記録するノートである。大学生であれば、おそらく 9 割以上の人が講義ノートをとっているであろう。多くの人にとって、講義で提供される知識を自分のものにするために、ノートをとることは習慣化している。講義ノートなしには、せっかくの講義の内容が